

岩崎秀雄『Culturing <O/Paper>cut』(Nippon Festival、2021年8月、神奈川県立図書館)

(生物学論文及び五輪開催都市契約書を刻んだ切り絵、ゲルライト培地、シアノバクテリア、フラスコ、水、光源、雑誌論文、書誌、書簡、映像)



過去の歴史とどう向き合うべきか、常に大きな課題だ。昨今の世界情勢は、改めてそれをアクチュアルな課題として突き付けている。昨年東京五輪に際しても同じことを考えていた。実は、私も人知れず五輪に「参加」していた。オリンピックを開催する際、開催都市は文化行事を開催する義務を負う。都市圏でも複数の文化行事が企画された。その多くは中止や無観客となったが、不祥事による著名作家の参加取り消しという炎上案件のみが盛大に報道されたので、おぼろげに記憶している方もおられるかもしれない。

この作品は、横浜市の神奈川県立図書館で開催された五輪関連の展覧会のために製作したものだ。以前の本誌の表紙(2017年春号)でも紹介させていただいた、自分が関わった生物時計の論文を切り抜き、論文の素材であったシアノバクテリアが論文を覆っていく「Culturing <Paper>cut」に加え、もうひとつセット、東京五輪の物議を醸した開催都市契約書を素材とし、過去の五輪に重い課題を残した歴史的なモチーフ(ナチ主導のベルリン五輪、ミュンヘン五輪テロ、メキシコ五輪でのブラックパワーサリユート、ドーピングやジェンダー問題の象徴としてのテストステロン)を切り刻んだ「Culturing <Olympic>cut」を新たに作り、映像や論文、書誌を組み合わせたインスタレーションを構成した。会場となった図書館は、個人が個人のままに集う場だ。それは、五輪が時に象徴する、集団的動員と熱狂とは全く異なる集いの在り方である。過去の知と向き合う場であり、今回の作品の素材の科学雑誌や社会の契約に関わる文書が保管されている場所でもある。そこで、江戸後期から現在までの、自然観・生命観に関する様々な書誌を配置した。その中には、五輪同様、社会や政治状況、戦前の植民地政策などを反映した科学の営みを示す文書群も多く入れておいた(南方・朝鮮統治時代の戦前日本の植民地科学の文献、戦前の微生物学に関する書誌、戦前の生物学文献や教科書、南方熊楠や牧野富太郎の直筆の書簡、江戸時代の天文思想の変遷を示す幾つかの書誌など)。

この展覧会、会場(日本の建築史上重要な前川國男設計施設群)やキュレーター、他の出展作家たちは魅力的だったが、コロナ禍以前に、そもそも東京での五輪招致の段階から近代五輪の在り方に違和感を覚えてきたので、依頼を引き受けるべきか逡巡した。関係者と何度も話し合いを持ち、祝祭的雰囲気にはくみしないこと、さらに五輪開催に関する違和感を隠蔽しない新作を提示することを条件に引き受けた。今回の展示は、コロナ禍の中、無観客開催となった。美術作家にとって無観客展示とは、極めて不条理で逆説的な状況だ。予定を変更して、足の踏み場もないようなインスタレーションにしたのは、準備段階で無観客と決まったからでもある。だが、事前に開催日時を告知できず、五輪関係サイトのハッキングのリスクを理由にライヴストリーミングすら禁じられたことは想定外だった(後日、記録映像が公開された)。感得されないライヴと生きるため(活かすため)のアーカイブの、予期せぬ邂逅に立ち会ったのは奇縁であった。闇は深いが、「鑑賞されざる作品、読まれざる蔵書、感得されぬ生命、気付かれざる者たち、行き場のない責任、立ち会えぬ葬儀」といった、矛盾に満ちた私たちの生の条件に満ちている膨大な「不在たち」に改めて思いを馳せる貴重な機会なのかもしれない。